女子がクラスの男子のおちんちんを見て学ぶ保健の授業

とある高校の2年A組の女子たちは、週に一度の保健の授業のために、特別教室に集められていた。普段は男女別で行われるこの授業だが、今日は女子だけが呼ばれ、男子は別の授業を受けていると聞か

されていた。教室の窓には厚いカーテンが引かれ、蛍光灯の冷たい光が室内を無機質に照らす。女子たちはざわつきながら席に着き、担任の佐藤美奈子先生が教壇に立つと、ざわめきが一瞬静まった。

「今日の授業は、性教育の特別カリキュラムです。男性の生殖器を直接観察し、その構造と機能を学びます」と佐藤先生が落ち着

いた声で告げた。黒板には「男性の生殖器：構造と個人差」と大きく書かれ、プロジェクターで教科書の図版が投影されている。

梨緒は「え、いつもみたいにビデオじゃないの？」と隣の沙雪未に小声で囁いた。沙雪未は「なんか…めっちゃ雰囲気やばくない？」と目を細め、どこか期待と不安が入り混じった表情を見せた。可菜子は

「性教育って毎回気まずいよね」と笑いつつ、教科書をパラパラめくったが、内心ドキドキしていた。弥奈は「またあのつまんない図見るだけかな」と呟きつつ、どこか物足りなさそうな顔。花香は「ちゃんと勉強しなきゃ」と真面目にノートを広げたが、頬がほんのり赤らんだ。愛梨は「なんか面白いことありそう！」と前のめりになり、菜那は「こん

な授業…恥ずかしいだけじゃん」と目を伏せた。萌美は「性教育って大事だよね！ちゃんと学ぼう！」と明るく振る舞う。

佐藤先生は淡々と続けた。「教科書や図だけでは理解しにくい部分が多いため、今日は実物を観察してもらいます。選ばれた男子5人にボランティアとして協力してもらいます。教育的

意義を理解し、真剣に取り組んでください」

その言葉に、教室が一瞬凍りついた。

「え、男子！？」「実物って…うそ、マジで！？」と女子たちの声が一斉に上がる。弥奈が「ちょっと待って、男子が来るってこと！？ここで！？」と立ち上がり、声を張った。可菜子は「やだ、絶対無理！見れない

よ！」と両手で顔を覆い、椅子に縮こまった。花香は「教育だから…仕方ないよね」と呟きつつ、指先が震えていた。愛梨は「え、誰が来るの！？超気になる！」と目を輝かせ、菜那は「こんなの…見ちゃダメなのに」と目をぎゅっと閉じた。萌美は「勉強だもん！ちゃんと見なきゃ！」と強がったが、頬が真っ赤になっていた。沙雪未は「や

ばい、誰かな！？翔太くんとかだったらどうしよう！」と興奮気味に囁き、梨緒が「やめて、想像しないで！」と慌てて制した。

佐藤先生は「騒がない。男子たちは了承済みで、教育的目的のために参加します。あなたたちも敬意を持って学びなさい」とピシャリと言い、教室の後ろのドアを開けた。そこから、5人の男子――田中悠斗、佐

藤健太、内藤翔太、山本大輝、鈴木涼太――が緊張で顔を引きつらせ、ぎこちない足取りで入ってきた。

男子たちが教室の前に並ぶと、女子たちの視線が一気に集中した。5人は教壇の前に等間隔で立ち、クラス全員の目に見える位置に整列した。教室の空気が一変し、女子たちの視線はまるでレーザーのように

5人の全身を舐めるように移動した。梨緒は「うそ、ほんとにこの5人…翔太くんいる！」と目を丸くし、沙雪未は「やばい、悠斗くん、めっちゃ緊張してる顔！可愛い！」と興奮気味に囁いた。愛梨は「大輝くん、絶対でかいよね、体育会系だし」とニヤニヤし、菜那は「見るの…恥ずかしいけど、気になる」と顔を赤らめ、チラチラと男子たちを

盗み見た。萌美は「勉強だから、ちゃんと観察しなきゃ！」と自分を奮い立たせつつ、視線が男子たちの腰の辺りに吸い寄せられていた。弥奈は「うわ、5人ともめっちゃ緊張してる！これ、めっちゃ見ちゃうよね」と笑い、可菜子は「どこ見ればいいの！？やばい、目が離せない！」とパニック状態。花香は「落ち着いて…勉強だよ」と呟き

つつ、視線が男子たちの股間に何度も流れた。

佐藤先生が冷たく指示を出した。「では、男子たちは一斉に制服と下着を全て脱ぎ、正面を向いて立ってください。女子たちは観察し、質問があれば挙手してください。教育の一環なので、真剣に取り組むこと」

その言葉に、男子たちの顔がさらに引きつり、女子

たちからは「キャー！」「一斉に！？」「うそ、ほんとに！？」「やばい、5人同時！？」という悲鳴と笑い声が混ざった大騒ぎが巻き起こった。弥奈が「やばい、5人同時って…どこ見ればいいの！？」と叫び、可菜子が「こんなの…頭パニック！」と髪をかきむしった。花香は「勉強、勉強だから…」と呟きつつ、視線が男子たちの股間に釘付

けになった。愛梨は「うわ、絶対見ちゃう！誰から見よう！？」と興奮気味に席で跳ね、菜那は「こんなの…見ちゃダメなのに」と呟きながら、視線が吸い寄せられるように男子たちの股間に流れた。萌美は「うわ、めっちゃ勉強になるよ、これ！」と叫んだが、声が上ずっていた。沙雪未は「翔太くんの…見たい！」と小声で囁き、梨緒が「やめて、声出

さないで！」と慌てて肘でつついた。

佐藤先生が「早くしなさい。時間はありません」と急かすと、男子たちは渋々動き始めた。教室は異様な緊張感に包まれ、女子たちの視線が5人の全身を貪るように集中した。5人はほぼ同時に脱ぎ始め、教室に衣擦れの音が響き、女子たちの視線はまるで獲物を狙う獣のように男子たち

の股間にロックオンされた。沙雪未の目は悠斗の股間に、可菜子の目は翔太の股間に、弥奈の目は大輝の股間に、愛梨の目は健太の股間に、萌美の目は涼太の股間に、それぞれ釘付けだった。梨緒は「やばい、どこ見れば…」と呟きつつ、視線が5人の股間を順番に巡り、花香は「勉強…」と呟きながら、視線が大輝の腰に吸い寄せ

られた。菜那は「見ちゃダメ」と自分に言い聞かせつつ、視線が翔太の股間に固定された。

田中悠斗は、「くそ、こんなの耐えられねえ」と心の中で毒づきながら、ブレザーを脱いだ。白いシャツのボタンを一つずつ外すと、引き締まった胸板と薄い腹筋が現れ、沙雪未が「うわ、悠斗くん、めっちゃカッコいい身体！」と囁き、視線が

彼の胸から腰、股間へと滑り落ちた。ズボンのベルトをガチャガチャと外し、ジッパーを下ろすと、黒いボクサーパンツが露わに。愛梨が「うわ、悠斗くん、下着までカッコいい！」とニヤニヤし、視線がパンツの膨らみに集中。悠斗は「見んなよ、頼む！」と叫びつつ、パンツを一気に下ろした。おちんちんがぽろりと飛び出し、平均よりやや大きめ

で、濃い毛に囲まれ、緊張で少し縮こまっていた。亀頭は薄いピンクで、血管がうっすら浮き、根元は太め。女子たちの視線が一斉に彼の股間に集中し、沙雪未の目がキラキラと輝き、可菜子の視線がじっと動かない。悠斗は「やべ、めっちゃ見られてる」と羞恥で顔が熱くなり、おちんちんがピクッと反応した。

佐藤健太は、「なんで俺が…」と呟きながらブレザーを脱ぎ、シャツを脱ぐと、柔らかいお腹とぽっちゃりした胸が現れた。梨緒が「ふふ、健太くん、なんか柔らかそう」と囁き、視線が彼の腹から股間に滑った。可菜子が「やめて、笑っちゃう」と肩を震わせつつ、視線は健太のズボンにロックオン。ズボンを下ろすと、グレーのトランクスが現れ、

女子たちの視線がパンツの膨らみに集中。健太は目をぎゅっと閉じ、トランクスを下ろした。